

**日本看護研究学会中国・四国地方会
第 21 回学術集会抄録集**



2008 年 3 月 2 日 (日)

岡山県立大学

岡山県総社市窪木 111

構造構成主義的看護研究法の理論整備

高木廣文（東邦大学医学部看護学科）

看護研究は、研究方法により量的研究と質的研究に分けることができる。量的研究は、物と物との関係を数値により表現するので、多くの研究者の共通理解を得やすく、科学的で客観的であると考えられている。一方、質的研究は、対象者の心の中のことを調べ、かつそのテキストを研究者が解釈するという、二重の主観的過程が含まれているため、質的研究結果の科学的エビデンス性に対して、疑義を感じる量的研究者も多い。

量的研究は客観的実証主義、質的研究は社会構築主義などの相互に異なる認識論を基盤とするため、普通の考えでは相互理解は困難であるが、西條（2005）による構造構成主義に基づけば、信念対立問題を克服できる。量的研究と質的研究の方法論上の対立は深刻ではあるが、構造構成主義の立場から、研究目的に応じて関心相關的に研究方法を選ぶことで解決可能である。現在では、“Mixed Methods”として、両者を同時に活用する研究方法も広まってきており、構造構成主義はその認識論的基盤を与えることができる。

質的研究のテキスト解釈の妥当性と、研究結果が科学的エビデンスになるのかという疑問は、解決すべき問題である。構造構成主義がその基盤とする構造主義科学論（池田清彦：構造主義科学論の冒険、講談社学術文庫、1998）によれば、「科学は同一性（構造や形式）の追求」であり、科学理論（モデル）は複数あってもよいが、目的とする現象を最も上手に説明できるものがよいモデルとされる。

竹田青嗣（言語的思考へー脱構築と現象学、径書房、2001）によれば、「言語の信憑構造」として現象、話し手、言語表現、聞き手の各間に信憑関係が存在することで、認識了解と意味理解の確信が成立するとされる。この点を踏まえて、ソシュールの一般言語論から考察すると、研究者がテキスト解釈を「正しく」行うためには、対象者と頭の中の言語構造（ラング）が同一／同型であるとする仮定が必要になるだろう。

質的研究の結果の一般化は、統計学的一般化の視点からではなく、分析的な一般化として関心相關的「継承」とアナロジーにより、継続的にまた他の研究者に活用され得る。

上記の議論の詳細は、高木（看護学雑誌、71(8)、712-715、2007）を参照して頂きたい。結局、構造構成主義に基づけば、質的研究も科学として一般化可能なエビデンスをもたらすことができると考えられる。